

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

●アンコールワット

カンボジア王国を見る

嘉手納基地からB-52爆撃機がベトナムに向けて毎日のように飛び立ち、北爆が続いていた。

ベトナム民族解放戦線地は中国やソビエトから支援を受けながら、単独でアメリカに立ち向かっていた。

現在のウクライナのロシアとの闘いの報道をテレビで見る度に、当時のベトナム民族解放戦線の孤独な戦いを思い起こす。

当時の日本の全共闘運動やフランスのカルチェラタン、アメリカの反戦運動やブラックパンサーや黒人暴動などはベトナム民族解放戦運動への応援となっていた。

アメリカに支えられたサイゴン政権が1968年1月の旧正月のテト攻勢により襲撃を受けた時、アメリカの敗北が予測された。

1975年、アメリカはベトナムで敗北した。

ベトナム、ラオス、タイに隣接し、メコンデルタの河口に位置するカンボジアは、ベトナム共産党ほど明確な国家理念を持たず、混乱が続いていた。

1976年に権力を奪取したカンボジア共産党・ポルポト派は、国民の1/4に及び多くの知識人達を粛清し、殺害したが、1979年1月にベトナム軍の侵攻を受け崩壊した。

1991年、コルバチョフによるベレストロイカとソビエト連邦の解体宣言以降、カンボジアは安定化に向かった。そのような時期にアンコールワットを見学する機会を得た。

タイ・バンコックから空路、プノンペンに入った。

空から見るカンボジア最大の湖、トンレサップ湖は茶色く泥のような湖面だった。

プノンペンではポルポト派の残虐さを示す博物館を見学した。おびただしい数のシャレコウベや人骨が展示されていた。

それは、大菩薩峠から浅間山荘に至る連合赤軍の「総括」と称する組織内のリンチ殺人を繰り広げた、追い詰められた左翼の姿に通ずるものであった。

また、現在のロシアの指導者プーチンが、昔のソ連邦の仲間であったウクライナを国家単位で憎悪し「総括」し、戦争を仕掛ける姿にも通じる。



1917年にレーニンがロシア革命に立ちあがった時、帝政ロシアの軍隊が寝返り、赤軍となり、ロシア革命が達成された。今またロシア軍が、プーチンに反旗を翻して、第2次ロシア革命が起きることは考えられないだろうか。

建築とは内部空間を形成する空間芸術である。

しかし中には、内部空間を持たない建造物も存在する。カンボジアのアンコールワット、アンコールトム、バイヨンなどの遺跡建造物群は内部空間を持たない。

内部空間がないために、この場で生活することはできない。密林の中に建つ東南アジア最大の文化遺産は、インドのヒンズー教の影響を受けた宗教建築で、12世紀にスーリヤヴァルマン2世が30年以上の工期をかけて建造した石造建築である。

建設当時この建物を創っていた多数の石工や彫刻家が何処でどの様に生活していたのか？ 更に現在この建物を維持管理している僧侶や宗教者の生活空間がどのようなものか？ 全く見えてこない。一説には木造の粗末な家屋で生活していると聞く。

現地で私達ツアー客が宿泊していた施設は、密林の中、屋根や床はあるが壁はなかった。入浴施設は、お湯ではなく水だけがホースの先からチョロチョロ出てくるものであった。

日本の名古屋大学の調査隊がアンコールワット遺跡群の発掘調査や維持保全活動に協力し、支援している活動の報告を聞いたことがある。

彼らもまた私達ツアー客が宿泊していたような施設で寝起きしていたものと思われる。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。